



5th STAGE  
 男声合唱組曲  
**雪国にて**  
 関川の里  
 或る誕生  
 雪の中の歌  
 昔の雪  
 老雪  
 雪中越冬

作詩 堀口 大學  
 作曲 多田 武彦  
 指揮 北村 協一

## 男声合唱組曲 雪国にて



作詩者 堀口 大學

明治25年(1892年)1月、東京は本郷に生まれる。17歳の夏、書店で偶然目にした「スバル」に掲載された吉井勇の短歌に魅了され、新詩社に入社。与謝野鉄幹・晶子夫妻を始めとする偉大な先達と、生涯の友となる佐藤春夫との出会いのうちに、詩作の道を歩み始める。自らが東京帝国大学の学生で住まいも赤門の正面にあったことから息子を「大學」と命名した父・九萬一は、有能な外交官であると同時に優れた漢詩人(長城と号した)でもあった。自分と同じ外交官にすべく、慶應義塾で無頼の日々を送っていた大學を任地メキシコに呼びよせた彼は、同じ頃息子にフランス近代詩の手引きをする。これがのちに日本の近代詩壇に新風を巻き起こした訳詩集「月下の一群」をして結実することになるのである。大學詩の育ての親ともいえる父は、終戦間もない昭和20年(1945)10月、疎開先の新潟県関川の里で他界した。父が願った外交官への道は病のために断念したが、第一詩集「月光とピエロ」(1919年)以降の数多くのオリジナル詩集刊行を始めとする大學の業績は、日本近代詩を語るうえで欠くことのできないものとなる。翻訳家としての評価も非常に高い彼であるが、その根底にあったのは、よき師、よき友、そしてよき父によって育まれた豊かな才能を持つ「詩人」堀口大學に他ならなかった。昭和56年(1981)逝去。享年89歳。

### 組曲「雪国にて」について

多田 武彦

詩人堀口大學先生は、第二次世界大戦末期の昭和19年11月、外交官だったご尊父と共に戦火を逃れて東京から興津に移り、同20年7月、更に新潟県中頸城郡名香山村関川に移り住まれた。そして同年10月31日、ご尊父急逝。

堀口先生は、その四十九日法要のあと、親交のあったかたがたに、次のような要旨の御礼状を送られている。

謹啓いよいよご清栄賀し上げます。長城堀口九萬一死去の際は、早速懇篤なご弔詞とお供物を賜わり有謹うございました。

(中略) 昨年十一月興津の小生仮寓へ東京から疎開、本年七月小生等と共に当所へ再疎開、(中略) 読書と散歩三昧の百余日を過ごしたのでした。葬儀は十一月四日、紅葉にうもる当所で、ダビに附しました。黒土の道を行くささやかな葬列を、妙高山がじっと何時までも見送って呉れました。(中略) 八十一才の生涯でした。書巻は一日もついに放さず、最後は陸放翁の詩集を読んでおりました。山重水複疑無路。柳暗花明又一村。と、こう、口ずさびながら瞑目したのではないかと思います。(中略)

#### 挽歌 一

越の故山に逝きましぬ  
 いくさの果を見とどけて  
 紅葉とともに散りましぬ  
 子の養うを待ちもせで

#### 挽歌 二

帰するが如く逝きましぬ  
 山の時雨の日ぐれ時  
 眠るが如くみまかりぬ  
 敗れし国の秋のはて

1978年(昭和53)上智大学グリークラブからの委嘱作品を作曲するにあたって、堀口大學詩集を読み通しているとき、「健剛院中陰」と題して掲載されている前述の書状に目を止めた。このときの感動をもとに、冒頭に「越の國中つ頸城のノ名香山の関川の里」に始まる「関川の里」を配し、これに雪の詩を続けて、組曲にまとめた。

学生時代、心酔し切って歌いつづけた堀口大學作詩、清水脩作曲の組曲「月光とピエロ」と同じく、堀口先生の、キラリと光る言葉や筆致は、この六つの詩にも随所に鑲められ、「ご尊父への暖かい愛情」「雪深い妙高高原の大自然」に包まれた、清浄な詩群として、私の心の中にも深く刻みこまれた。

伝統的に高い演奏技術を駆使する関西学院グリークラブによって、この堀口先生の、また一つの奥ゆかしい一面が、見事に描かれることだろう。演奏会のご成功を祈る。